

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

# 戦史館だより

2019年10月1日発行  
戦史館事務局〒029-4427  
岩手県奥州市衣川陣場下  
41番地 齋オフィス花岡  
編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

## 第18回通常総会 9月7日(土)に開催

台風が日本列島を襲い、各地に大きな被害をもたらしましたが、皆さんご無事だったでしょうか。戦史館もなんとか無事に、今年の総会を開催できました。

委任状による出席者 111名。当日会場へ足を運んだ実出席者は、今年はやや少なく17名でしたが、総会前半は畠山理事が議長に選任され、前年度の事業報告と収支決算、2019年度の事業計画と収支予算、全ての議案が承認されました。後半は会長理事から遺骨帰還再開に関連して、最近の戦後処理をめぐる報告と問題提起がありました。



インドネシアパプア州、スピオリ方面からの遺骨帰還が中断されて4年。ようやく今年6月に二国間の条約が締結されました。前号ではG20大阪、ジョコウィ大統領の来日時に締結予定とお伝えしましたが、とても2日間の国際会議の中に条約締結のセレモニーを組み込める隙間はないことが判明し、急きょ6月25日ジャカルタで調印されました。

英語、インドネシア語、日本語で同じ内容が書かれた“交換公文”公文書が調印されたことで、国際約束が発効しました。

では直ぐに出発できるのか？ いいえ6月に合意しても、即派遣できる訳ではありません。インドネシア側に派遣の申請をして、どんなに早くても派遣できるのは年明け2020年1月。今までどおりパプア州内への協力要請、住民への配慮、考古学者の事前調査などが延々と続くのです。日本から現地へ、どのような経済協力がなされるのかも、いまだ不明のまま気がかりです。それでも、止め置かれたまま4年も待ちわびたスピオリ方面、アイブラボンディ島とムサキ島から120柱が帰還できることが第1の目標です。

太平洋戦史館が厚労省の委託を受けて、6年間継続していた未送還遺骨情報収集事業が2017年3月で終了し、その後は遺骨収集推進協会に引き継がれるはずが、現地への送金もストップされたまま身動きできず、新たな収容もできませんでしたが、今ようやく……。

# 特定非営利活動に係る事業会計収支報告書

2018年度特定非営利活動法人太平洋戦史館 2018年8月1日から2019年7月31日まで

# 19期収支予算(一般会計)

2019年8月1日～2020年7月31日まで

科 目 ・ 摘 要		金 額 (単位:円)			金 額		
I 収 入 の 部	1. 会費収入 ( ) <small>(内:前年度)</small>		501,000			456,000	
	正 会員[3,000×153] ( 161名)	459,000			420,000		
	会報会員[1,200×35] ( 45名)	42,000			36,000		
	賛助会員[30,000×0] ( 0 )	0			0		
	2. 寄附金収入 (1,080,300)	1,113,600	1,113,600		1,200,000	1,200,000	
3. 事業収入(譲 譲 譲)	( 23,580)	71,098	71,098		53,553	53,553	
4. 特別会計残から繰入 ( 400,000)	250,000	250,000		250,000	250,000		
当期収入合計			1,935,698			1,959,553	
II 支 出 の 部	1. 事業費		1,136,903			1,160,000	
	専従者給与 ( 600,000)	600,000			600,000		
	旅費交通費 ( 92,060)	52,114			60,000		
	送料通信費 ( 236,769)	189,735			200,000		
	出版発行費 ( 68,040)	68,040			70,000		
	調査研究費 ( 51,220)	111,627			70,000		
	展示館光熱費 ( 70,194)	75,113			80,000		
	事務消耗品費 ( 107,986)	40,274			60,000		
	現地協力費 ( 9,720)	0			20,000		
	2. 管理費		817,890			820,000	
	会費・会議費 ( 61,009)	38,718			40,000		
	施設使用料 ( 600,000)	600,000			600,000		
	管理諸費 ( 129,029)	158,697			160,000		
雑費(雑費16,470含) ( 18,278)	16,896			20,000			
租税公課 ( 1,821)	3,579			予備費20,000	20,000		
3. 借入金返済(借入800,000) ( 0)	0	0		返済 0	0		
当期支出合計			1,954,793			2,000,000	
当期収支差額			▲19,095			▲40,447	
前期繰越収支差額			59,542			40,447	
次期繰越収支差額			40,447			0	

9月21日、ムサキ島、アイブラボンディ島から最新の遺骸安置所の写真が届きました。



写真左は2015年春に作られたムサキ島の遺骸仮安置所。半年後の遺骨帰還を想定していましたが、4年の間にかろうじて屋根は残ったものの(写真中央と右側)横板は破壊されてしまいました。アイブラボンディ島でも荒波と強風で、屋根ごと飛ばされていました。

スピオリ方面からの帰還後に、次の目標として遺骨推進協会に提案しているのは、未送還情報収集で発見されたまま収容が進んでいないビアク島内の洞窟、ヤーペン島、パプアニューギニアとの国境付近。そして新条約に新たに加わった西パプア州マノクワリ方面のヤカチの遺骨帰還も視野に入れ、残された時間はわずか。集中的に取り組みましょう。

## シベリア抑留者遺骨事件に関連して

今年の総会返信はがきで一番多かった意見や質問は、ロシアの遺骨収集で、日本兵以外の遺骨が多数混入していた事件の報道に関連して「インドネシアはどうか?」「DNA鑑定をすれば解決できるのか?」というものでした。

まず、インドネシア、パプア州で戦史館が長年調査してきた方法について説明します。日本兵の遺骸の情報が寄せられると現場まで出向き、日本軍の官給品や個人を特定できる“遺留品”の有無を確認します。その状態を記録し、現場を保存するか、散逸する心配がある場合は、固体別に収容し仮安置します。次の段階、遺骨帰還のための派遣では、法医学者によって日本兵の遺骸であるのかどうか鑑定され、正確な柱数が報告されます。鑑定の結果、日本兵かどうか判定できない(Unknown)遺骸は、この段階で別に分けられます。日本兵の遺骸は現地で火葬され、追悼式を経て、遺骨となって漸く日本へ帰還できます。

では報道されているシベリア抑留者の遺骨はどうでしょうか? 現地の墓に個別に埋葬されていた遺骨が掘り返され、千鳥ヶ淵に納骨される前に再度国内で高温で焼かれて圧縮され、墓苑の地下コンクリート部屋に閉じ込められてしまう…これこそが大問題!

次はDNA鑑定の問題です。父の骨、兄の骨を捜して…というには50年遅すぎました。80歳近くなった遺族から、身内の骨を特定したいという声はもう聞こえてきません。

「すべての白骨遺骸を現地で火葬せずに、日本へ運んでDNA鑑定をせよ」という意見にひと言。DNA鑑定が必要な場合は、現地で鑑定をお願いすべきです。運んだ後に鑑定をして、日本兵でなかった方の遺骨をどのように供養できるのかも忘れてはなりません。

来年1月の遺骨帰還は、これまで通りインドネシア大学医学部の法医学者と、今回は日本から形質人類学の専門家も同行する予定で、火葬された遺骨が帰還できる見込みです。

## 総会「会員の活動紹介」小原守夫専務理事の“盛岡てがみ館”活動から

盛岡てがみ館は岩手県ゆかりの著名人とその関係者の手紙のやりとりを通じて、その人物やその時代を紹介する盛岡市の施設です。石川啄木、金田一京介、板垣征四郎、宮澤賢治、高村光太郎はじめ同館が所蔵している手紙は数万通。その中から展示テーマを考えて年間3回の企画展や特別点を開催しています。同館企画アドバイザーを担当している小原さんは7~9月の特別展『軍事郵便手紙が語る戦争の記憶』にあわせ、9月14日に「ビアク島の戦いと遺骨収集」というテーマで講話を行いました。7日の総会は、その講話のダイジェスト版。特別展の内容の一部が紹介され、5人の兵士のはがき25通、その中の一人ビアクで戦死した畠山勲さんが満州から送った軍事郵便も紹介されました。

(写真は盛岡てがみ館Webページから引用) 検閲印がくっきり押され墨も塗られています。小原さんは戦史館の未送還情報収集や遺骨帰還で度々現地を訪れ、戦史館だよりも詳しい現地情報を執筆されているだけに、ビアクが壊滅状態に置かれても降伏しなかった当時の背景まで、詳しく解説いただきました。

